『近代日本の宝飾文化史』１章、大正前期編―その①

P１～10

※参考文献は章の最後にまとめて記す。
※所蔵先、出典の記載のないものは日本宝飾クラフト学院蔵。

１章
大正前期
大正元～八年（１９１２～１９）
第一次世界大戦後、宝飾産業躍進期の装身具

1-1 この時代と宝飾装身具の概要

大正期（１９１２～２６）は、わずか15年と短かった。あっという間に過ぎた15年といっていいだろう。この時代は明治から始まった日本の近代化の中間期という見方をされ、影の薄い時代と評されることも多い。だが、日本という国にとっても貴金属宝飾産業にとっても忘れることのできない出来事が起きた時代である。

大正期は、前半と後半では時代の様相が異なる。そこで、この大正期を２章に分けて見ていく。１章は好景気に沸いた「前期」、２章は不況の時代の「後期」として、産業界の出来事や宝飾品の動向について年代順に見ていく（多少時代が前後する場合や前期と後期にまたがる記述もある）。

大正前期は重要な時期なのでこの章に多くのスペースをさく。

第一次世界大戦―本格的な宝飾品時代の幕開け

大正三年に始まった第一次世界大戦は、日本に未曽有（みぞう）の好景気をもたらした。その結果、貴金属宝飾産業もこれまでにない繁栄を謳歌、「金銀製品の売行は激増し、貴金属業は空前の活況に湧いた。そして帝都における主要産業のひとつに伸し上った」（『貴金属製品の民間検定開設とその前後』①）。

百貨店や多くの宝飾店が、かつてなかったほどの多彩な宝石の入った装身具を売り出し、ここに本格的な宝飾品（ジュエリー）の時代の幕が開いた。

婦人雑誌では当時の宝石と指輪の流行について次のように伝える。

「宝石（たま）の方は、依然としてダイヤが女王でございます。これに飽き

た方で、初めてエメラルドをお持ちになります。ルビーは女学生、若夫人向、平民的で御座います。全勢なのは真珠で、これは安価な養殖のものまでも、割合に多く出ると申します。真珠は別としてルビーなどは、型が一般に方形を新しいものとしてゐます。そして矢張り横長で御座います。爪形どめは失せて、嵌込が尚ばれてゐます。併しおとなし向きの方では、梅形、菊形、波形、桜形、六寶形などの爪どめで、稀に曲線応用のものもあります」（大正五年10月『婦人画報』「秋の装身具」）。この記事から、ダイヤが一番人気で、養殖真珠が売り出されたので真珠人気が高まったことが分かる。

第一次世界大戦後の好景気を背景に、大正六年には業界初の組合（東京貴金属品製造同業組合）も設立され、産業基盤の整備が進められた。

高額品他、各種装身具が普及

大正期の百貨店や宝飾店はダイヤの入った指輪などの高額品を主に売っていたがそのようなものばかり扱っていたわけではなかった。新しく都市部に台頭した新中間層と呼ばれるサラリーマン家族でも手が届く価格の商品も多く出まわった。

女性の装身具は、西洋風の髪形（束髪）の普及により束髪櫛や束髪簪が著しく発達した。従来からの日本髪用の櫛や根掛も、以前に比べ軽やかで華やかなデザイン・作りに変化した。

和装の装身具である帯留はこの時代に大いに発達。各種宝石を使ったものを中心に、彫金のもの、各種の素材を使ったものなど、高級品から普及品まで数多く作られた。この時代には男性のスーツが一般化したことにより、ネクタイ・ピンやカフスボタン、バックルなどの男性用装身具が現在とは比較にならないほど普及した。

大正期の有力宝飾小売店

明治中期から後期に屈指の宝石貴金属店といわれたのは、銀座の天賞堂、京橋の大西白牡丹、上野池之端の玉宝堂、日本橋若松町の丸嘉（『日本の宝飾文化史』②）。このうち天賞堂と丸嘉は、大正時代にも引き続き宝飾品の小売市場をリードする有力小売店として世間の注目をあびていた。

だが大西白牡丹（明治初年創業）は拡大路線（店舗増築・改築）で借財が増え、大正五年11月に閉店。この事は「東京名物大西白牡丹の末路」として経済誌に大きく報じられた（『実業之日本』第十九巻第十二号）。

また、江戸時代から続く最古参の玉宝堂（安永七年創業）は、大正四年に宮内省買上品に疑義がある商品を納入するという不祥事件以来信頼を失い、従前の勢いはなかった（大正五年8月21日『大阪朝日新聞』）。店は大正七～八年頃まで確認できるが（『日本嚢物史』）。それ以降は不明。

③　それ以降は不明。

かわりに頭角をあらわにしたのが、明治創業の大西錦綾堂（銀座）や大勝堂（銀座）など。これらの店は高級指輪などの洋風装身具に力を入れることで業績を伸ばした。同じく老舗の白牡丹本店（銀座）、万久（京橋）など小間物系の店も、新時代の洋風装身具を積極的に取り扱い存在感を示した。

百貨店では三越呉服店の躍進が著しい。大正初期には「今日は帝劇、明日は三越」のキャッチコピーで知られた三越は貴金属装身具分野でも続々と新商品を発表した。

真珠の流行に伴って御木本真珠店は大正期に大きく飛躍し、真珠を求める内外の顧客に御木本の名声は拡がった。

これらはいずれも東京に拠点がある店だが、大阪にあって全国区的な名声を博した店が、尚美堂（明治三十三年創業）である。この店は新時代の店らしく、大正後期に使われ始める「宝飾」（「Jewelry」の日本語訳）を大正の早い時期から店名に付けた先進的な店だった（**図1-1-1**）。その他、大阪には芝翫香（明治三年創業）、石原時計舗（弘化三年創業）などがあり、また京都には寺内（明治十八年創業）、名古屋には長谷川時計舗（明治十四年創業）などの老舗があった。

なお、製造小売業の御木本真珠店を除けば、現在と同じく大正時代（～昭和初期）の小売店は基本的に小売専門で、製造は外注である。それらの製造業者については大正前期最後の第５章でまとめて紹介する。

図 1-1-1
尚美堂宝飾店広告
大正４年６月『婦人世界』
早くも宝飾腕時計を扱っている。広告上には「Shobido Jewelry Store」と「Jewelry」の文字。

白い貴金属「プラチナ」の台頭

大正期を語る上で見逃せない貴金属がプラチナ（当時は「白金（はっきん）」と呼ばれることも多かった）。プラチナは明治20年代から装身具に用いられている貴金属である（『日本の宝飾文化史』）。

この貴金属は大正時代になると俄然人気が高まり、ダイヤ入りの指輪やその他の宝飾品に競って用いられるようになった。

その人気の理由はいろいろ考えられるが、一言で言えば「金の派手な色合に飽きて素朴な白金の色合を好みました人々の嗜好に適しました」（『日本嚢物史』）といえるだろう。

また後で述べるが、ダイヤを引き立てるにはプラチナが最適な貴金属であるという認識が確立されたことも大きな理由である。

いずれにせよ、現在とは異なり大正時代にはプラチナは金よりも圧倒的に高値であった（**図１-１-２**）。にもかかわらず多くの人がプラチナを好んだところにもプラチナ人気の高さがうかがえる。

金、白金、銀相場
純金　六圓二錢
純銀　二十一錢七厘
白金　三十五圓
（十三日德力本店報）

図 1-1-2
金、白金（プラチナ）、銀相場
大正 14 年 11 月 15 日
『東京時計商報』より

1-2 この時代の洋風装身具の推移

喪の装身具で幕開け

大正期の装身具は明治天皇の死を悼む黒色のリボン（図1-2-1）や和服の左胸につける蝶形結びの黒布で始まった。

図 1-2-1

三越呉服店ポスター「諒闇（りょうあん）に入る」より
明治天皇の喪に服している二人。指輪も帯留も黒色の赤銅（しゃくどう）製。

三越伊勢丹蔵

『週刊朝日百科「日本の歴史」』102 号より

明治天皇大喪の服制では、主に上流階級夫人は、洋服は黒色で光沢のないもの、帽子、髪飾りもすべて黒色とされた。一般国民の喪服心得では、和服の場合は左胸に蝶形結びの黒布をつけ、洋服では左腕に黒布をまとうこととされた。このようにして、国民の間に、西洋の喪の色である黒が浸透していった（『日本衣服史』④）。

早速、小間物商からは赤銅（しゃくどう）製の黒色の喪章や同じく赤銅製の簪も売りに出された（図1-2-2）。

喪のジュエリーというと、イギリス、ビクトリアン中期（1861～1887）のモーニングジュエリー（Mourning Jewellery）を思い浮かべる人も多いと思うが、日本の喪のジュエリーは意外に簡素で、しかもその使用はすぐに終わった。

（コラム1-1）

黒いリボンの二人

図1-2-1の三越「諒闇に入る」には実際のモデルがいたようで、良家の姉妹らしき、ほぼ同じ構図の挿絵が残っている。

この挿絵は、大正元年8月2日の『朝日新聞』に、入社一年目の岡本一平（漫画家）が描いている絵。記事には「黒きリボンと愁（うれい）たき顔」として「目立たぬ衣服に揃ひの黒きリボン、哀愁を湛（たゝ）へたるそのいたいけな姿」との一文が添えられている。

黒いリボンの二人
『朝日新聞の記事に見る奇談珍談巷談〔明治〕』⑤より

図 1-2-2
赤銅製リボン形喪章広告
三井屋商店
大正元年９月『演芸画報』

御大典祝賀の装身具

大正二年末頃からは、早くも大正四年（１９１５）の大正天皇即位の御大典に向けて、記念の大衆向けの安価な王冠形束髪櫛（図１−２−３、１−２−４）が売り出されるなど、自粛ムードから一転して祝賀ムードが高まった。

図 1−2−3
王冠形新ダイヤ入り束髪櫛広告
きく屋
大正２年 12 月『女学世界』
新ダイヤ（ガラス）が入ったセルロイド櫛。

図 1−2−4
王冠形束髪櫛
図 1−2−3 の王冠形束髪櫛とほぼ同形の実物。
新ダイヤ（ガラス）入りセルロイド櫛。

御大典の頃には記念指輪や束髪簪、帯留（図１−２−５）、御大典模様と称する、めでたい図柄を取り入れた帯留（図１−２−６）、髪飾り（図１−２−７）などさまざまな装身具が売り出された。

皇后用の宝飾品―御木本真珠店が制作

大正四年の御大典には、御木本真珠店によって皇后（貞明皇后、

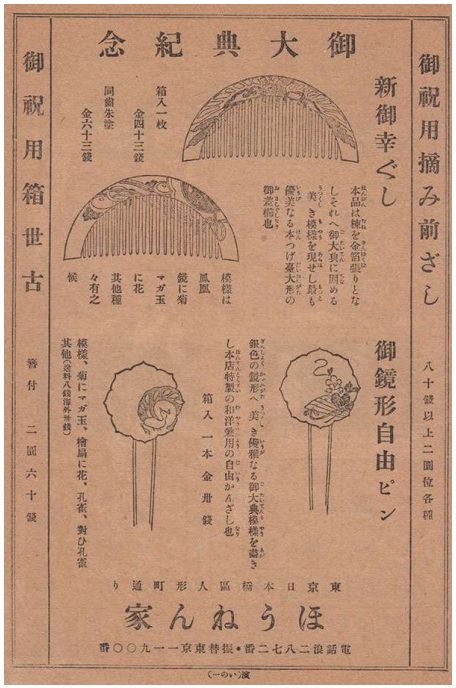

図 1-2-7
御大典模様の櫛、和洋兼用簪広告
ほうねん家
大正４年頃
和洋兼用簪を「自由ピン」と呼んでいる。

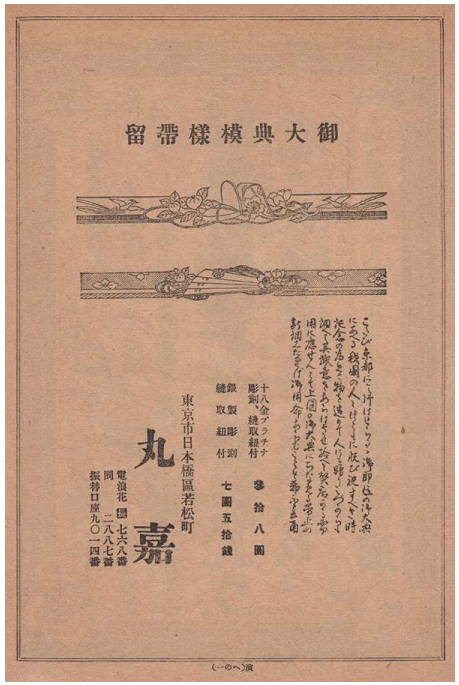

図 1-2-6
御大典模様の帯留広告
丸嘉
大正４年頃

図 1-2-5
御大典記念指環など広告
実業之日本社代理部
大正４年 10 月『婦人世界』
指輪は 18 金製古鏡形。

節子妃）着用の公式用胸飾り（菊花胸飾り）も作られた（図1-2-8）（『ミキモト／真珠王とその宝石店１００年』⑥）。

明治時代にはすべてヨーロッパで作られていた皇室のフォーマル用の宝飾品が、この時から国内で制作されるようになった。これは画期的なことであり、貞明皇后は日本の宝飾品発達を語る上で、忘れることのできない皇后といえよう。

図 1-2-8

正装の貞明皇后

『目でみる大正時代・下』⑦より

宮内庁蔵

胸飾り着用写真。ティアラは昭憲皇太后から引き継がれたもの。

その後、大正六年には皇后のティアラも御木本真珠店によって作られた。ティアラは皇后の第二公式用ティアラ。第二公式用とはいえ、初めての国産ティアラであり、これ以降、御木本のデザイン・技術力は皇室の認めるところとなり、その後の皇室関係の公式用宝飾品の制作を一手に受けることとなる。

大正八年には梨本宮第一王女子の方子女王と朝鮮王族李王世子（世継ぎ）との結婚のためのティアラも制作。また大正十三年1月には皇太子（昭和天皇）ご成婚に際し、妃殿下着用のティアラその他の調度品の制作を任されることとなった（『ミキモト／真珠王とその宝石店１００年』他）。

このように皇室用宝飾品は御木本真珠店の独占であり、御木本の名声を大いに高めた。

（コラム1-2）

方子女王のティアラ制作をめぐって
―梨本宮家と御木本とのやりとり

梨本宮方子（なしのもとみや）女王と李王世子李垠（イウン）との結婚は大正九年だが、大正六年にはすでにその準備が進められており、ティアラは一万二千円で御木本真珠店が受注した。

この仕事は御木本真珠店にとって重要な仕事のため、制作にあたっては御木本幸吉本人も梨本宮家に出向き交渉にあたっている。

「御木本など来り。宝石に付相談。（大6・11・29）　御木本も下絵をかき来る。（大6・12・6）　御木本来り、色々きめ、一万二千円にて冠をあつらへる事。（大6・12・10）　御木本、下絵を持参。あまり気に入らず。再考。（大6・12・15）」

その時のようすを、母親の伊都子は日記にこのように書き残している（『梨本宮伊都子妃の日記』⑧）。